

加賀奉書における摺紙の研究

黒川 威人

1. はじめに

手漉き和紙は今日衰退の一途をたどっている。20世紀はすぐれて工業化の時代であったゆえ、和紙だけでなく手作りの多くのものが工業生産にとって換われ今日に至っているのだが、工業化には多くの利点と引き換えに欠点があった。すなわち、その長所は、均一の品質のものを大量に、廉価に、しかも素早く作れるというところにあったが、逆に製品のバリエーションを少なくしてしまったことである。

美術家（書家を含む）にとって重要な表現媒体である紙の場合、このことは重大な問題を含んでいる。すなわち、歴史上名高い紙には、その紙ならではの表現があったと考えられるからで、一例を上げれば、11世紀に書かれた『麒麟抄』¹⁾には摺紙（打ち紙）²⁾など特殊な紙に書く際の技法心得が載っているが、そうした紙が作られなくなることは、即ち表現の幅が狭くなることであり、美術技法上の退歩にはかならないからである。また古典の臨模はもち論、古書画の修復など学術上かつてと同じ品質の紙を必要とするケースは多いが、作れないとすれば完全な仕事は望めない。共に日本文化の衰退を意味すると言っても過言ではあるまい。

本研究は、史上名高い加賀奉書の本来の姿を摺紙であったとの仮説に基づき、文献のみならず、古文書の実測や製造方法の復元などの実験的な手法で明らかにすると共に、本県特産品としての産業的な復活にも手掛かりを得ようとするものである。

なお本稿は平成2年度本学共同研究の成果

報告でもある。

2. 加賀奉書とは何か

加賀奉書とは一般に、近世を通じて加越能を支配した前田家の祖、前田利家が医王山麓二俣の住民に漉かせて以来、歴代の藩主用あるいは將軍家などへの献上用に漉かれた上等の料紙を指す。原料は楮³⁾で医王山（939m）を中心とする山野に自生していた優良なものである。ただ、加賀の製紙はこの時が起源ではなく、二俣には越の大徳と呼ばれた僧泰澄が養老3年（719）に伝えたとか、連如上人が本泉寺を巡錫した報徳元年（1449）に紙漉きを教えたとの伝説がある。これらはあくまでも伝説に過ぎないが、優良な原料楮と水に恵まれた医王山麓の紙漉き場は、医王山寺院群という消費地を背景に、前田氏入国以前から存在したことは間違いない。

文献的には、平安時代の資料として良く知られる『延喜式』に中男作物として一人40張の紙を上納する国42か国の中に加賀が含まれており、この頃加賀で紙が作られていたことははっきりしている。『延喜式』は延喜元年（901）に撰進されたもので、この時期より前から紙漉きが行なわれていた証拠ではあるが、それが二俣であるかどうかは特定できない。他の国の例から見て、むしろ国衙に近い、もっと交通の便のよい他の場所であったかも知れない。

さて、二俣が前田氏指定の御料紙漉き場となったことを記した文献として知られる『御献上紙等御料紙由緒覚書』⁴⁾によれば、天正11年（1583）二俣村の紙漉きが紙草（すなわち原料楮）を買い出しに越中に行き、佐々成政

軍の動静を探り通報した賞として前田利家から扶持を受けたとあり、その後文禄元年(1592)に御料紙漉きの御用がこの村の紙漉きたちに命じられている。

この時、御料紙として作ることを指定された紙の品目は、大杉原紙などの杉原系統に、中奉書紙などの奉書、および上包み紙の類である。

杉原紙は、中世においては公家や武家の贈り物の故実になったほど貴重品視されていたもので、播州杉原がその原産地としてこの名がある。その後、各地で作られるようになったが、加賀で作られるものは加賀杉原、あるいは強杉原と呼ばれ、やや品質を異にしたものようだ。しかし、しばしば文献に登場するところから、都でも一定の評価がなされていたことが分かる。

さて加賀奉書は、これが最高級の紙であることを記したものに、黒川道祐による貞享元年(1684)開版の『雍州府志』があり、ここで初めて文献に登場するのだが「加賀奉書、越前鳥子以是為紙之最」と越前鳥の子とともに最高の評価を受けているのである。

ところが下って正徳3年(1713)刊の『和漢三才図絵』の奉書紙の項には「越前府中より出るものを上」とし加賀奉書は3番手に、杉原では1番手が備後で加賀杉原は2番手とされている。さらに享保13年(1718)に執筆された江戸期の紙の文献として著名な『新撰紙鑑』では加賀奉書は中品、加賀杉原は上品に継ぐ、と評価されているが、いずれにしても黒川道祐の評価からは大きく下落してしまっている。

この理由として、加賀の御料紙は他国移出禁制品であったことが上げられ、たまに領国外へ出るものがあっても中下等のものに限られたからと考えられているのだが、果たしてそれだけが理由であったのだろうか、疑問の残るところである。最盛期の加賀奉書とは一体どのようなものであったのだろうか。

3. 擣紙プロセスの存在

ここに一つ興味深い事実がある。それは加賀藩の御細工所中の職種の一つに「擣紙」なる名が見られることで、文政11年(1828)の『御細工者本役兼芸歳附帳』⁵⁾によれば、この御細工者の本役は小刀細工ならびに擣紙であり兼芸は御能作物となっている。当年83才という高齢で、既に家督を息子に譲ってはいるが80石を給されており、名を中村丈介という⁶⁾。ところが嫡子中村兵蔵の本役欄には父と同じ小刀細工はあるものの、一子相伝のはずの「擣紙」は消えている。これまでの調べでは以後「擣紙」の名が出てくることはないところから、これ以降「擣紙職」はなくなったと考えられる。

ここで「擣紙」とは打紙の意であり、文字どおり槌で打った紙を言う。これによって表面は平滑に紙質は緻密になり、墨の滲みが少なくなると、筆の走りがよくなるとされるものだが、『延喜式』では平均1日2人で100張の作業であったことが記されている。

ちなみに製紙は1日1人が平均170張であるからかなりの難作業であったのだろう。

なお、紙を打つという作業を「紙打ち」または「礎打」といい、出来上がった紙を「擣紙」あるいは「打紙」とよぶのが普通であり以下これに従う。(参考文献10による)

「紙打ち」は奈良時代には盛んに行なわれたが平安、鎌倉と時代を経るに従って徐々に行われなくなり、江戸ではもう行なわれなくなっていたと考えられるのだが、古格を重んじた御細工所ではこの頃まで、上等の進物品や古書の補修用など特別の紙にはこのプロセスを施していたのであろう。享保12年(1727)書き改めの「御細工所格式帖」⁷⁾の中に「紙打申小者兩人充割場より」の記述があることがこれを証している。

なお、兩人という表現から紙打作業は二人組で行なわれたことを示しているが、上記格式帖では、それまでの担当者として故人の岡藤

長兵衛、興津四兵衛の2名を上げている。

以上のように御細工所にはある時期まで摺紙を造る技術があったことは確かだが、奉書紙にそれが施されていたかどうかは定かではない。これについては当時の奉書紙に当たって調べるしかない。

4. 摺紙技術はなぜ消えたか

現在加賀奉書として作られているものはもちろん、どのような紙であれ、土地の古老から聞きうるかぎりの過去にさかのぼってみても、紙打ちという加工工程があったとは誰の記憶にもないが、これは産地では生紙を造る「造紙」の工程だけであったからであろう。

これに対しかつては、紙打ちなど「装潢」工程を経て熟紙としたもののみが正式の料紙であったことは「延喜式」や「麒麟抄」「入木抄」⁸⁾の記述によって知ることができるが、加賀藩では装潢工程は城内の御細工所でのみ行なわれていたと考えられる。したがって御細工所が廃止になった明治年間に入って消えたのは当然として、それ以前の段階で、さしも古式を重んじた御細工所でも、行なわれなくなった時期があるように思われる。

理由の一つは、純粋な地元産の原料楮が調達出来なくなったからではないかと考えられるのだが、その根拠は、先に述べたように、中世の文献に出てくる加賀の杉原紙は「強杉原」とも呼ばれていたことと関係がある。すなわち、この異名は紙の質から来していると考えられ、それはとりもなおさず原料に由来すると考えられるからである。

加賀の杉原は、雪国独特の緻密で艶のある風合いをもっていたが、同時に非常に強い紙であったのであろう。それを支えたのは、この土地の優良な原料のみを使い、しかも雪晒しなどの繊維を痛めない穏やかな漂白法を行なったことで、これがため、これに紙打ちの処理を施して、表面の滑らかな書き味の優れた紙にすることが可能であったのである。

しかし、時代とともに紙の需要は増大し、地元産の原料だけでは賄い切れなくなっていく。そして量的には恵まれているが軟弱な暖国産のものが入り始めると、これまでのような紙打ちの処理には耐え得なくなってしまったと考えられるのである。

この説を裏付けるものとして、前掲の『御献上紙等御料紙由緒覚書』中に「正徳五年(1715)に西国筋でできた楮皮を試し漉きするよう仰せ付かったが、その結果は紙の性が悪く、他国産楮を使うことはお差し止めになった」との記述が見出される。

同書にはこれ以降原料に関する記述は見当たらないので、その後他国産楮を使ったかどうかはこれだけでは分からない。しかし、このことは当時、既に北陸産の原料が逼迫していたことを証しており、何らかの手を打たない限り、なし崩し的に他国産原料が入り込んできたことは想像に難くない。増大する紙の量を確保することが至上命令であったと思われるからである。ちなみに、藩が楮取集所を金沢に設置して加賀三郡および能登口郡の楮専売制を実施したのは下って天保12年(1841)のことである⁹⁾。

なお、天命5年(1785)の御城外諸役所絵図(石川県歴史博物館蔵)中の御細工所にはまだ摺紙所なる室名が記されているが、さらに何年か後の絵図(成巽閣蔵/江戸中期とされる)では土蔵が増えており、年代的には明らかに後のものだが、摺紙所の名前は消えている。この頃は、既にあまり重要視されていなかったのであろう。いずれにしろ先に述べた中村丈介を最後に摺紙職そのものもなくなったと考えることができる。

5. 摺紙実験

往時の加賀奉書が紙打ちプロセスを経たものであったかどうかを実証するために、実際に加賀奉書を打つ実験を行なって見た。

なお、紙打ちの方法は現在の箔打ち技術に

求めた。理由は、手打ちでは一日100枚程度という奈良時代の標準枚数以上には造れないが、これを箔打ち機械で行なうことにより大幅に能率を上げることができ、場合によっては加賀奉書の擣紙を産業化することも可能と考えたからである。

以下に実験記録を記す。

期間：平成2年12月25～28日

場所：金沢市内、塚本金箔

用紙：加賀奉書（斉藤博氏抄造）

箔打ち紙の仕込みには大きく分けて三つの工程がある。

- 1) 水打ち（水に湿らせただけで打つ）
- 2) 灰汁（あく）打ち（わら灰等の灰汁に漬けて打つ）
- 3) 卵や柿渋を加えた灰汁打ち

擣紙の場合は1)の水打ち中心であるが、まれには虫食いを防ぐため灰汁打ちということも行なわれたようだ¹⁰⁾。ここではとりあえず箔打ち紙の仕込み工程と同様な方法で水打ちを行なう。

(1) 奉書紙の切断

擣紙に実際に書いてみる官能検査をも意図しているので、機械に掛かる限界の半切の大きさにカッターで切断する。これでも、通常の箔打ち紙よりもかなり大きい。

(2) 白蓋紙（楮厚紙）を用意する。

水が浸透しやすいよう白蓋紙を菊花状に並べ換え、水瓶に沈めて水を吸わせる。重なった部分は水が染み込みにくくなるので、パラパラと2～3枚ずつ全体に水が染込む様子を見ながら投入する。数分後、すべてに水が浸潤していることを確かめ板の上へ引上げる。そのままではポタポタと水が垂れるのでバケツの上へ載せ、作業台のそばへ置く。

(3) 奉書紙に水分を移す

濡れた白蓋紙を一枚ずつはがし、ビニールシートを敷いた台の上に敷き並べる。今回は箔打ち用の白蓋紙を使ったため6枚を連結し奉書半切の大きさに対応させ5重に重ねる。

その上に乾いた奉書5枚を重ね、濡れた白蓋紙を一重敷き並べる。以下これを繰り返し最後は濡れ紙を5重にかぶせビニールシートを掛けて置く。これは奉書に湿気を均等に移すための作業である。今回は小判の濡れ紙を連結したので湿りにムラが出たが、奉書そのものを使うことも出来るという。

〈午後〉濡れた白蓋紙を取り除き（これは繰り返し使用可能なので別途紐に釣り下げて乾かす）、湿り気が入った奉書紙のみを一枚ずつ積み直す。

(4) 蓋紙準備

いよいよ紙打ちを始めるに当たり、表裏に奉書と同寸法の（やや小さめが良い。理由は後述）白ボール紙を用意する。この白ボール紙には20ミリ間隔（これはハンマーの径によって異なる）にボールペン等で線を引く。この線に沿って機械のハンマーを打ち下ろすためだ。（実際には紙の方を動かす）なお、どの線まで打ったか分かり易くするため数字を付ける。裏面は線と線の間には今度は筆者の判断でアルファベットを付ける。（裏表の判断がし易いように）

(5) 紙打ち開始

いよいよ打ち紙開始である。先ず機械の強さを調整する。初めは弱く、次第に強くするところがコツである。ハンマーと紙の隙間は最初は指が入るか入らないかくらいに調節する。塚本氏の指が基準になっているわけだ。

機械のクランクロッドの目盛りは2.5、バネの遊びとしては5～10ミリといったところである。ようやく準備完了。いよいよ1ラウンド塚本氏が模範を見せてくれる。ハンマーは反時計回りの回転運動をしているので、紙は右から左へとずらしながら打つ。（逆に打つとシワができる）速度は4ミリくらいの合板をミシン鋸で切るときのスピードと似ている。ハンマー痕は5～6ミリピッチで輪を連続して描く。右端まで打ったのち、ハンマーを左端に戻すときは素早く（ハンマーの上下動は

3～4回の間に)し、この間に紙の束の乱れを直しきちんと紙をつかみ直す。しばらく打つと紙同志がくっつき始め安定してくるが、最初は余り端は打たないで20ミリほど余裕を取る。

(6) 打面を変える

一通り打ったら、打ち紙の適当なところで二分し、上の紙をひっくり返す。これはハンマーに当たる面(つまり白ボール紙に直接当たる面)をいつも同じにしないためである。

次に全体をひっくり返し、今度は線と線の間を叩く。一通り打ち終わったら、表のときと同様、直接白ボール紙に当たる部分を変えてやり1セット終了。(県美術館の宮氏らはこれを1回と呼んでいるので我々もこれを1回とする)

(7) 手数てかずを入れる

4回打ち終わったところで手数を入れる。手数とはくっついた打紙を一枚一枚はがして並べ換える作業を言う。これは紙の中の水分を発散させることと、紙の面を変えることによって紙面が荒れないようにする役割を果す。

なお、このとき紙をいくつかの山に分けることがあるが、打紙の水分の蒸発を促すためであり、早く乾かすときは3つ4つと山の数を増やす。

紙の湿り気に偏りがあるときは、これを均すため紙はきちんと重ねず3分の1くらいずつ前後左右にずらせて重ねる。また途中まで重ねたら一度ひっくり返すなどする。

(8) 打撃力を上げる

ここでクランクの目盛りを2.7に上げる。(ハンマーはやや強く当たるようになる)2回打ったところで失敗し、重大なしわを作ってしまう中断。右下へハンマーがきた最後のところが問題で、機械を止めるためレバー操作をする瞬間に手元が狂うことが多い。やむを得ず、ここで再び手数を入れる。

手数後は慎重を期して塚本氏に1回打ってもらう。筆者は再三注意を受けるのだが、紙

を掴んでいる手につい力が入り、上へ持ち上げ気味になるためハンマーがまともに紙に当たっていないらしい。また当たる位置も左右とも3分の一辺りの中央が特に強く当たるらしく、二つの大きな窪みとシワができる。

意識して小指と薬指は盤に擦らせるようにしているのだが、無意識の内に手に力が入っているものと思われる。塚本氏に打ってもらうときしもシワも減り、紙全体が落ち着きを取り戻すから不思議である。

さらに3回は筆者が打ち、手数を入れて本日はこれまで。ビニール袋にくるみ湿気が逃げないようにして帰宅。打ち紙に来るなら連続して3日は用意しなさい、と言われた訳はここにある。つまり、最初に入れた湿りが持続している間、という意味なのである。

第二日目

〈午前〉朝、すぐに4回打ち、手数を入れたところで昼食。

〈午後〉ロッドの目盛りを2.8に上げ4回打ち。(計18回のサンプル採集)手数を入れる。更にロッド目盛りを3に上げ3回打ち。(途中20、21回のサンプル採集)手数を入れてこの日は終わり。しんどい一日であった。

第三日目

〈午前〉この日は助手として家内を動員、カメラおよびビデオカメラを持ち込んで記録をとる。朝、先ず2回打ち。手数は2山に分けて行なう。(計23回のサンプル採集)さらに3回打ちを行なった後、3山に分けて手数を行なう。(計26回のサンプル採集)

〈午後〉さらに3回打ちの後、2山に分けて手数を行なう。(計29回のサンプル採集)手数は、湿りの均質化を計るため一枚一枚ラフにずらせて行なった。

(9) 火が入る

かなりツヤが出てきたが、「もっと火が入らないといけない」と塚本氏の弁。火が入るとは、打った後、紙が熱くなる状態をいう。湿気の抜け具合がそれによって判断されるのだ。

(打音も次第に金属的に変わる)

第四日目

〈午前〉3回打ちの後、蓋紙の白ボールがしわのため、引っ掛かりが出てきたので新しいものに取り替える。(計32回のサンプル採集)蓋紙は叩かれて明らかに奉書よりも伸びている。先に、寸法は小さめの方がよいと注意されたのはこのせいもある。一般に蓋紙の方が大きいと、つい縁の辺りにハンマーを落としがちであるが、これは紙に破れを来す原因となる。手数の後さらに4回打ち。(計36回のサンプル採集)4山に分けて手数、4回打ちを行なう。(計40回のサンプル採集)手数の後5回打つ予定だったが紙がくっつかなくなってきたので44回で打ち止めとする。もっと打てばまだまだツヤが出るとのこと。しかし、箔打ち紙ほどのツヤを出すのが目的ではないので、これで終了とする。

(10) 湿気を取る

- 1) 家に持ち帰り一枚ごとに新聞紙にはさむ。
これを怠ると紙にかびが入りすべてがだめになってしまうのだ。最後に百科事典を重しに載せ年を越す。
- 2) 第1回の体験を元に第2回の実験にかかるべく紙を裁断し、比較のため他産地の異なる種類の紙も用意したが、未だ実験を終えるに至っていない。これについては次報に譲りたい。

6. 古紙検分および実測

現在歴史博物館になっている成巽閣には歴代藩主が発行した知行宛行状が多数保存されているが、同館佐藤館長の特別の計らいにより、これを実測させて頂く機会を得た。実測にあたっては元県美術館学芸主幹の東澄子氏(同館非常勤)および学芸員諸氏の全面的協力を得た。以下はその概要である。

なお、測定した全資料のデータは末尾に一括して掲載した。

期間: 平成3年2月7~26日の間の5日。

測定: 厚さ/マイクロゲージを使い1枚につき6か所を測定。コンマ3桁まで記録。重量/電子秤によりコンマ2桁まで測定し記録。

検分: 風合いは記録し難いこともあり、共同研究者の柳橋教授のほか、二俣の斉藤博氏、富山県八尾町の吉田慶介氏および子息の5人に期間中の一日立ち会ってもらい共同で実検分を行なった。

結果: 実際使われた古文書を検分した結果、加賀奉書は初期の檀紙風の荒々しいものから豪壮な加賀奉書へと発展し、やがておとなしい杉原風へと変化していることが分かった。

一口に加賀奉書といっても時代によってまるで様相の違うことが手に取ってみて非常によく理解できたが、同時に、現在の紙とは余りに異なるため、当初の目的である紙打ちの有無だけでなく、様々な興味ある事実や問題が浮かび上がったことは収穫であった。

擣紙のプロセスが施されていたのはこのうち加賀奉書の形成過程と杉原風確立期であると見られるのだが、幕末期に近づくにつれ普通の紙の表情に近くなり、擣紙のプロセスは認め難くなる。明確に何年からと特定は出来ないが、ある時期以降このプロセスが行なわれなくなったのは確実である。

測定を行なった紙のデータ一覧表によって仮に密度(gr/cm^3)が0.3以上のものを擣紙と考えると、(擣紙としては数値は低い)3代利常が未だ利光と名乗っていた元和2年に初めて表われ、寛永期後半になると数が増えることが注目される。しかしなぜか一旦下火になった後、万治2年からははっきりと盛んになった様がうかがえ、綱紀の代にいたって非常に品質が安定したことが分かる。そして、重教の時代に至って宝暦13年頃から急速に廃れていったことがわかる。しかしこれはあくまで密度を元にした仮説に過ぎない。

資料は、あきらかに奉書の技術は変遷があったことを物語っている。もちろん時代をおつ

て技術が正確になって品質にばらつきがなくなっていく様が明らかなのだが、しかし紙としての風合い、魅力といったものはそれとはやや別であったこともよく分かる。利常の頃の未だ荒々しさは残るが、いかにも豪放な感じの紙は時代を反映しているように筆者には見え、イメージ的にはこの頃のものがかにも加賀奉書らしく見える。

この頃は荒々しい紙をおとなしくさせるといふ本来の目的で紙打ちが行なわれたものと考えた方が妥当であろう。やがて綱紀の代に至ると紙のサイズ、厚さ、重さなどの品質が非常に安定してくるが、紙打ちは、より書き心地の優れた上等の紙とするために行なわれたのではあるまいか。

やがて時代が下ると、紙そのものが軽く薄く迫力がなくなっていくが、この頃はほとんど紙打ちはなされていないと思われる。このデータで見ると、中村丈介の代では既に特殊な古書の補修用ぐらいにしか紙打ちはされなかったということかも知れない。

「御細工所格式帖」のなかに『以後正月2日の帳の役付には（紙打ちは）記入しない』となっているので、これが書き改められた享保12（1727）年頃は既に重要視されていなかったということであろうか。あるいはこの後20年以上にわたって、同様の密度の高い紙が使用され続けているところを見ると、この頃は技術が行き渡って、割場付きの小者ならば誰にでもできる仕事になっていたということであろうか。

7. おわりに

ここまでの研究によって、どうやらかつての加賀奉書は搗紙であったらしいことが明らかになったが、それが途中から消えたこともまた明らかになったわけである。

その技術がなぜ消えたかは4章で述べたとおり原料がその一つであると推測される。

だが、費用や時間を構わず優品のみ作った

とされる御細工所において行なわれなくなったのは、なおそれだけでは説明のできない様々な理由があるには違いない。しかし、その廃絶の理由を詮索することは本論の目的とするところではないので、ここではこの頃（宝暦期）藩の財政が極端に窮乏していた点と重なるところを指摘するに留めたい。

むしろ技術的には、紙打ちだけで往時の素晴らしい奉書を復元できるかどうかの方に問題が残る。越中、加賀を代表する二人の紙匠が、「どのようにして漉いたか分からない」「雁皮と漉き合わせの可能性がある」「どうしてこんなに純白の紙ができたのか」などなど、紙打ち以外に様々な技術的な疑問を発しているからで、この意味では紙匠たちに実物を見せたことは意味があった。

このうち、白さに関しては米の粉（齊藤博氏によれば水にとかした上澄み液）を混入したためかと思われる¹¹⁾ので齊藤氏にはそうした製法での復元を依頼してあり、同氏が鋭意実験中である。現在までのところ1枚漉くのに5分くらい掛かっているという中間報告を受けている。

いずれにしろ、復元は紙打ちの問題だけではなく、それほど簡単なことではないことが明らかになったといえる。

注記・参考文献

- 1) 世尊寺行成と称す、寛弘7（1010）年。
- 2) 次章、柳橋教授「搗紙（打紙）の基礎概念」参照。
- 3) クワ科の落葉かん木。皮が和紙の主要原料。
- 4) 日置謙編、石川県史、昭和4（1929）年。
- 5) 金沢美大美術工芸研究所編、加賀藩御細工所の研究（一）平成元（1989）年。
- 6) 前掲書、御細工方勤功願。
- 7) 前掲書。
- 8) 尊円法親王、延平11（延文元年／1356）年。
- 9) 高田長紀、北陸産紙考・上巻、昭和45（1970）年
- 10) 大川昭典・増田勝彦、製紙に関する古代技術の研究II。保存科学No.22、昭和58（1983）年
- 11) 高田長紀、前掲書。